

被災者を支えた ボランティア活動



解 説

この度の震災においては、国内外から延べ130万人にも上る人々が被災地に駆けつけ、ボランティアとして、救援物資の搬入、炊き出し、清掃、医療・救護、高齢者の介護、保育など避難所におけるさまざまな活動に従事した。(図1参照)

こうしたボランティアの昼夜を隔てない献身的な活動は、全国の人々の胸を強く打つとともに、被災者の自立への大きな推進力となったが、その一方で、震災発生当初において大量のボラ

ンティアニーズと活動者を効果的にコーディネートすることができなかった行政側の課題も多く残した。今後は、幅広い分野のボランティア活動を一元的に取り扱う体制の整備、住民に身近な相談窓口のきめ細かな整備、情報提供の効率化、ネットワーク化の促進、コーディネーターの育成と資質の向上、大学や高等学校等におけるボランティア教育の推進や参加する機会の充実など、ボランティア活動の支援システムを体系的に整備していくことが肝要である。

ところで、今回の震災では多くの一般ボランティアに混じって、避難者でいっぱいになった自分たちの学校や様変わりした街の惨状を前に「今の自分に何ができるか」を自らに問いつづけ行動を起こした中学生や高校生の「ボランティア」がいたことも忘れてはならないだろう。震災後、子どもたちは学校にやって来て、極めて自然な形で自分たちにできる避難所のさまざまな運営作業に関わっていったことが学校の報告からわかる。

炊き出しやボランティアの人たちによる救援

手記

震災時のボランティア活動を体験して

県立兵庫高等学校2年 上杉幸子

1月17日(火)午前5時46分、未曾有の災害と言われた阪神大震災が発生しました。関西は地震が起らないと、そう信じていましたが実際に起きてみると、改めて人間の無力さ、小ささを思い知らされたような気がします。朝のうちは、地震の被害の大きさがわからずに、普通に登校するつもりでいました。しかし、テレビに映し出された阪神高速の倒壊や三宮の大惨事を見るにつけ、思いもよらないことが現実に行き起きていることを思い知らされました。

1週間ぐらいたった頃、学校が避難所になっていることを知り、自分にも何かできることがあるのではないかと思い、学校に出かけました。そこで見たものは自分が1週間前まで通っていた兵庫高校ではなく、約3000人の被災された方々が教室・体育館・廊下にもたよる避難所としての兵庫高校の姿でした。

そんな状況の学校で、私たちがまず行ったことは物資の搬入、食事の配給、給水の手伝いなどでした。当初は、断水が続いていたため、トイレ掃除などはブルーの水を使い、手を洗う水さえないような状態

でした。日常生活からは考えられないような事態が次々に起こりました。今まで、当たり前と考えていたことが、いかに大切なことであったかを痛感しました。

また、ボランティア活動を始めた頃は、鉄道もまだ復旧していなくて北区にある自宅から学校までをバスで通っていました。とは言うものの、道路は渋滞していて、普段の倍以上もの時間をかけてやっと学校にたどりつくというような日が続きました。また、家に帰るときは、近くのバス停からではとてもバスに乗ることができず、始発の神戸駅まで歩くこともありました。そこからバスに乗ってもやはり時間がかかる上、運行も不規則なため、乗りたいバスもなかなか来なくてなんとか行けるところまで行ってそこから歩いてみたり、ついでだから一緒にどうぞと言ってくれた見知らぬ人のタクシーに便乗させてもらったこともあります。

兵庫高校だけではなく、長田小学校にもボランティアとして出かけましたが、そこで私たちが初めて行ったことは学校の中を歩き、自分の手にあった仕事を探すことでした。私たち高校生ができることは

物資の仕分け・運搬等の手伝い、さらには、電話の番や呼び出し放送、弁当の配布、簡易トイレの清掃、飲料水運びなどについて、特にボランティア活動をしているという意識もないまま始めたという子どもたちが多かったように思われる。やがて、被災地外の学校からも生徒会や部活の子どもたちが先生に引率されてボランティア活動に参加するようになり、支援の輪は次第に広がっていった。子どもたちのこうした一途な行動は、避難所での不自由な生活を余儀なくされていた人々に明るさと呼び戻し、被災者に生きる勇気や希望を与えるなど被災地の「このころの復興」に大きな役割を果たした。

子どもたちは、避難所でのさまざまな奉仕作業への参加を通して、自分を生かすことが社会の人たちの役にも立ちうる存在であることに気づいたことだろう。また、相手の立場に立ってものを考えることや自ら責任をもって行動することの大切さなど多くのことを学んだに違いない。

こうした取組の数々は、ボランティア教育の



もつ意義や必要性を改めて認識させるとともに、こころ豊かな人間の育成を目指して取り組んできた本県の教育の成果をいみじくも映し出す結果となった。神戸市内のある高等学校で実施されたボランティア活動に関する意識調査では、「参加した」と答えた生徒が全体で5人に1人の割合であり、「今後、機会があれば参加する」と答えた生徒は実に60%強にも上っており（図2参照）、この数字は被災地の高校37校を対象とした他の調査でもほぼ同様の結果が得られている。（図3参照）

限られています。その限られた範囲で、言われたことだけをするのではなく、自分で自分達のできる仕事を一つでも多く見つけたすかが大切だったのです。ボランティア活動とは自分達のできる範囲のことを何も言われずに進んでやってこそ意味があるのです。そのことを教えられたように思います。

今回の震災で失ったものというのは数多く、計り知れないほど大きかったと思います。けれども、そのような中で私たちが得たものも大きかったように思います。地震発生から学校再開までの約3週間、私がボランティア活動に参加したのはわずか10日余りでした。

それでも、その短い間に私のボランティア活動に対する考え方は大きく変化しました。はじめのうちは、自分は何かをしてあげなくてはならないということばかり考えていましたが、人の目につくような大きな事だけではなく、目につかないような小さな事をしているだけでも何かの役に立つことができるということがわかりました。受付・放送のようなたくさんの人と接するような仕事から学校中を走り回るような仕事までいろいろな仕事を経験しました。とはいえ、やっぱり私にはたいした仕事はできていなかったように思います。けれど、そんな私たちに

避難されている方々は、「ごめんね、ありがとう」と声をかけてくださいました。救援物資が入ってくるとはいっても、十分でないことも多く、不自由な生活を強いられている方々が私たちのしたほんの小さな事に喜んでくださっていると思うと、本当に嬉しくなりました。

また、ただ仕事を待っているだけではなく、自分で適切な判断をして行動していく事の大切さを考えさせられました。比較的自由な校風の上で生活している私たちにとっては、このことは大きな教訓として活かされる事だと思います。

たった数日間のボランティア活動でしたが、そのわずかな間でボランティア活動というものを身近に感じるができるようになりました。今まで身近で大きな災害を体験することがなかったということもありますが、今回の震災によってボランティア活動に参加するよいきっかけができたと思います。

地震だけでなく、そのほかのいろいろな災害で、今回私たちがしてもらってきたように、たとえ現地に行けなくても今回体験した事を活かして何か協力できる事を見つけ、どんな小さな事でも自分にできる事を自主的にやっていければいいと思っています。

県や市町の教育委員会にあっては、今後はこうした実態を踏まえ、子どもたちのボランティア活動に対する関心を深め、体験の機会や場の提供に努めるとともに、この度の震災において多くの教職員や子どもたちが参加した活動の成果に学び、体験を共有することを通して、他人に対する思いやりの心や公共のために尽くす心、社会に奉仕する精神等の育成を図り、ボランティア教育の先進県として、一層の充実に努めていくことが求められる。

ここでは、避難所での被災者への救援・支援活動に従事した教職員や子どもたちの感想やボランティア活動に参加した人たちの体験を通して学んだ作文などを、それぞれの地域や学校で発行されている体験記録集から拾ってみた。自己の生き方や社会の在り方を考える上での貴重な示唆を含んだものが多い。

図1 一般ボランティアの活動者数

期間	活動者数（延べ数）	一日平均
1月18日～2月17日	62万人	20,000人
2月18日～3月16日	38万人	14,000人
3月17日～4月3日	13万人	7,000人
4月4日～4月18日	4万人	2,700人
4月19日～5月21日	3.6万人	1,100人
5月22日～6月20日	2.1万人	700人
6月21日～7月23日	2.6万人	800人
7月24日～8月20日	2.2万人	800人
8月21日～9月20日	2.8万人	900人
合計	130.3万人	

〔福祉部・長寿社会政策局すこやかな社会づくり推進室調査結果〕より

手記

忘れ得ぬ人々

県立長田高等学校教諭 鎌野正人

(1) ボランティア

長田高校にもたくさんのボランティアがこられました。3月のある日、三重県からのボランティアの中に、私が高校1年生の時に国語を教わった先生がおられたのです。兵庫県で教師をしていたのは2年間だけだったのですが、その先生は地震直後から、「神戸の街のために何かしたい」、そう思っておられたそうです。その晩は昔話に花が咲きました。

「ぼくも何かせんとな」といって、長田商業のある生徒は、仕事が終わってから授業までの間、ピロティーで弁当やお茶を配ってくれたりもしました。

一人のおばあちゃんがありました。いつも「先生、いつもありがとうな」と言葉をかけてくれました。時には「ちょっと待ってよ」といってオレンジや飴をくれたりもしました。回りの人たちの“暖か

さ”に包まれ、励まされた毎日でした。

(2) 隙間から得たものは

学校には隙間などない。危険であるからといってすべてを塞いでしまっている。親は子どもには必要だと（親が）思うものをすべて与える。子どもは子どもで、他から与えられるまで自分から行動を起こそうとはしない。なかつたら自分で探せばいいのに、努力しない自分を責めるところか、「親のせいだ、親のせいだー」と言う。

が、あの数十秒間で全部が吹っ飛んでしまった。街並みには焼け跡が広がり、隙間だらけ。人々の心にもぽっかりと穴があいてしまった。その隙間を埋めることは誰にもとうていできないことのように思われた。しかし、隙間は、日本中の、世界中の人々の思いやりによって埋められていった。愛のあふれる救援物資や、やさしさ一杯の小包が世界中から神戸にやってきた。

図2 ボランティア活動の意識調査

1) あなたは今回の震災に関連して何か奉仕作業をしましたか？

1年 (%)	した 17.7	しなかった 82.3
2年 (%)	した 31.3	しなかった 68.7
3年 (%)	した 33.1	しなかった 66.9

奉仕作業の内容としては、避難所での炊き出し、救援物資の仕分け・運搬、清掃、子供の相手などで、しなかった理由は、自分の家の水汲みや片付けに追われていたためにできなかったという回答が多かった。

2) 今回の震災では多くの人が奉仕作業をしましたが、今後機会があれば参加しますか？

1年 (%)	する 57.4	しない 18.3	わからない 24.3
2年 (%)	する 59.1	しない 16.6	わからない 24.3
3年 (%)	する 63.7	しない 15.9	わからない 20.4

(県立兵庫工業高等学校調査より)

“する”と回答した生徒は「今回助けてもらったから」、一方しないと解答した生徒には「今回活動に参加したが被災者が何もしないから」といった理由からのものもあった。

“わからない”と回答した生徒は「その時にならないとわからない」、あるいは「今回も自分の家族のことで精一杯だったから」というのがほとんどであった。

それだけではない。若者たちがボランティアとなってその隙間を埋めつくしていったのだ。あの「新人類」とか、「三無主義」と言われた若者たちである。隙間が生まれたときに「今、自分にできることは何か」と考え、実行したのであった。もう新人類とは言わせない。すばらしい未来を築き上げることのできる若者たちであったのだ。

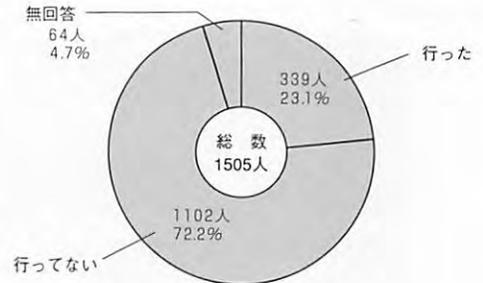
隙間があったからこそ、人々にそれを埋める力が湧き溢れてくるのではないか。



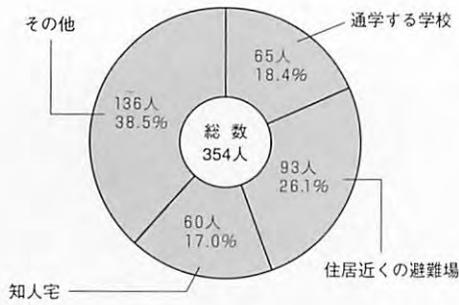
図3 ボランティアに関する被災地の高校生の意識



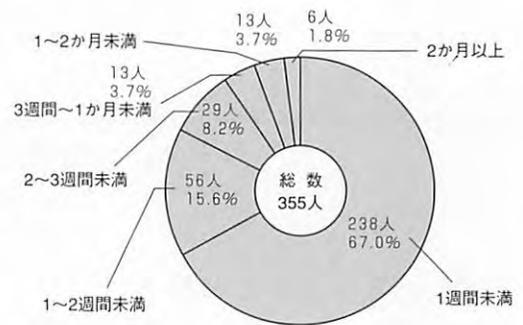
1) あなたは、震災直後に震災に関わってのボランティアを行いましたか？



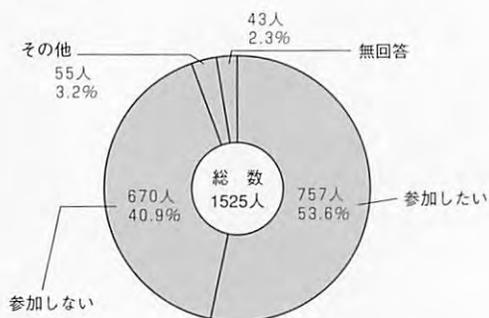
2) 質問1で「行った」と答えた人で、どこで行いましたか？



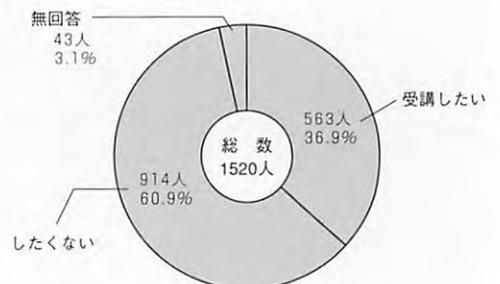
3) 質問1で「行った」と答えた人で、行った期間は延べで次のどれですか？



4) あなたは、今後ボランティア活動に参加したいと思いますか？



5) あなたは、学校の授業で福祉に関する科目があれば受講したいと思いますか？



手記

初任者研修に係る支援活動に参加して

猪名川町立大島小学校教諭 諸留佳代子

私は、神戸市立高羽小学校の支援活動に参加しました。テレビなどで見ていたボランティアの方が働いていた様子をイメージして参加しましたが、避難住民の方々が中心となり、行動されていたので意外でした。

私から、どんな仕事があるのか聞いてみても、特になく、逆に避難住民の方々の自立が話題になっていた時期だったので、住民代表の方に指示されたことを手伝いました。主な仕事は食事の準備でしたが、食事当番の役割分担がしっかりと機能していたことに感心させられました。こういうどうしようもなく困った時だからこそ、地域の人々が力をあわせるということが大切なんだと感じました。

また、住民のほとんどが高齢者の方々でしたが、仕事をてきぱきとこなしておられたので驚きました。それと同時に単身の方が多かったことにも少なからずショックをうけました。おひとりでのたみの上で座っておられる方、横になられている方、いろんな方がいらっしゃいました。

中でも心に残ったのは、ほんの少し言葉をかわしただけでもうれしそうに笑顔で受け入れて下さったことでした。もう少し、あのおばあちゃんとお話をするだけで、寂しさや不安を取り除いてあげられるお手伝いがしたかったです。

支援活動に行く前は子どもたちとの関わりや、学校のお手伝い中心に考えていましたが、それよりも避難されている方々との出会いが、一番大きな位置を占めていました。今回の経験の中で私が心を痛めたこと、またすごい!と感じたことを学校に戻って、クラスの子どもたちに話しました。震災の恐ろしさ、人と人とのつながりが忘れられないためにも、子どもたちに伝えていくことが大切ではないかと思えます。



手記

初任者研修に係る支援活動に参加して

北淡町立富島小学校教諭 納 三生

4月の中頃、私は神戸市中央区にある二宮小学校の方にボランティア活動でお世話になりました。その頃の三宮は、阪急の駅もなく、いたる所ビルが解体されており、車の長い列ができて異様な様子でした。

私が赴任しています北淡町立富島小学校も震源地の近くということで大きな被害を受けています。児童も全校生百人くらいの中に2人も亡くなって、私が担任している学級の子も半数近くが仮設住宅に住んでいます。その子たちもせまい仮設で個人のプライバシーも十分に守れないまま生活していますが、二宮小学校の方にいらっしゃった方々も同じような状況でした。私も神戸に住んでいたときに震災にあい、それなりに思う事もあります。

さて、ボランティア活動というのは、ほとんど初めての取り組みでした。支援活動の内容は、朝・昼・夜の食事を配ることと、各室にお届け物をする程のささやかなものでした。名前でもんな

方々がいらっしゃるかはわかりましたが、直接会うという機会はありませんでした。避難の人々を受け入れる学校側も朝から夜まで大変であろうと思います。でも、ボランティア活動の日々の記録のノートを見て、全国各地から震災後間もない神戸に来られて活動して下さった人々がいらっしゃるのを身近に感じる事ができました。私はというと、すぐに神戸を出てしまい、何一つできなかった者の一人です。ボランティアをしたかったという気持ちもありました。しかし、実際はできずにいました。ある先生に今からその気持ちを目の前の被災した子ども達に返していけばいいんじゃない?と言われ、初めてささやかな自分なりの支援ができるのだと感じています。少しずつ私なりの支援を未来にわたって目の前の子どもたちに返していければと考えています。

それまでの教育活動と震災から学ぶこと

—県立兵庫高等学校の報告より—

福祉協力校として

震災前に本校ではどれくらい防災教育・安全教育に取り組んでいたか。残念ながら年に一度避難を中心とした一般的な消防訓練を実施する程度であった。しかし本校では校訓である四綱領『質素・剛健・自重・自治』を日常の指導に具現化するために、「自主自立の精神を養い、自ら学ぶ力を育てること」、「心豊かな人間性の育成」を教育の重点とし、その一環として福祉教育の充実に取り組んできた。5年前からは神戸市社会福祉協議会から福祉協力校の指定を受けている。

福祉協力校の主な活動には、吹奏楽部による老人ホーム・養護施設・児童館等への訪問演奏会や交流会、有志生徒による福祉体験ワークキ

ャンプへの参加のほか、文化祭では福祉に関する展示・募金・献血活動を行っている。そのほか異文化への理解を深めるため、インターナショナルデーを毎年開催し、外国人留学生との交流会ならびに発表会などを持っている。

従来は募金活動にしても、献血運動にしても、どちらかと言えばただ協力しているだけという受け身の姿勢が見られることもあったが、近年は様々な行事が生徒会等の組織を通じて生徒による主体的発想と運営によりうまく実行に移された。そのきっかけとしては、『なぜこのような福祉活動をしているのか?』ということに対する生徒自身の意識の転換と理解が考えられる。特に今回の大震災の後は主体性がいっそう強まってきたように思われる。

今回の大震災は、生徒のボランティアや広く福祉全体に対する見方を大きくかえるきっかけになったように思う。

手記

「ボランティア活動を通して」

県立兵庫高等学校3年 古田由美

私は震災後、ボランティアとして何度か兵庫高校へ足を運びました。ボランティアというと、食事、お風呂等の生活の援助、お年寄りのお世話などが真っ先に浮かぶと思いますが、私と友人は、主に避難している子供たちの遊び相手をしました。勿論、炊き出し、トイレ掃除も手伝ったのですが、1・2年生がまだ休校だった頃は、その中の有志が大勢ボランティアに来ており、手が余ってしまう状態でしたので、私の友人が提案して紙芝居をすることになったのです。

紙芝居という提案を聞いたとき、正直言って私は、できることならしたくないと思いました。慣れない演技をして、子供たちにひやかされるのではないが、喜んで紙芝居を見てもらえるのか…不安がたくさんあったのです。ところが、とにかくこの紙芝居が受け入れられるのか試してみようと、三つの紙芝居を上演したところ、思ったよりも人が集まりました。その中には紙芝居をしてみたいという子も少なくなく、一生懸命に紙芝居を読んで聞かせてくれる子もいました。そして、みんなと遊んで帰ろうとすると、「次は、いつ来てくれるの」と尋ねてくる子がたくさんいました。

子供たちが喜んでくれたのだと感ずることができ、私は、その時初めて、恥ずかしさよりも来て良かったと感ずることができました。

その後も何度か紙芝居をしましたが、その頃には他のボランティア団体の方が、子供たちのためにと、兵庫高校へたくさん訪れてくださるようになりました。人形劇団、劇団、楽団の方、アニメ映画の上映を企画してくださった大学生の方々によって、はじめの頃に比べると本当に多くの催しが行われました。しかし、そのような中でも私達が紙芝居をすると、子供たちは喜んで見に来てくれました。

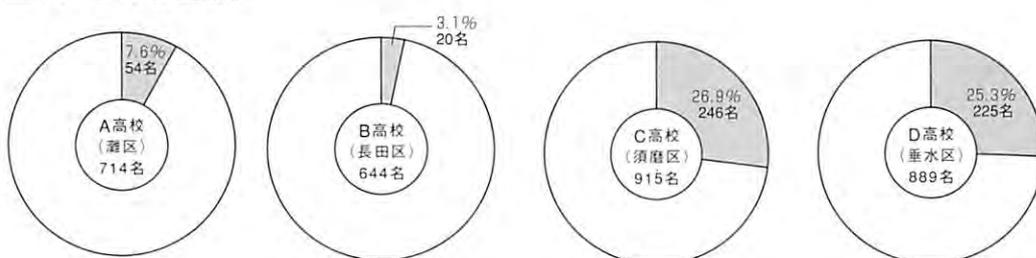
今、私は、あれ程恥ずかしいと思っていた紙芝居を含めて、ボランティア活動に参加して良かったと思います。最初にボランティアに来た時は、何かをしてあげるのだ、という意識を強く持っていました。しかし、私達を必要としてくれていることを前面に押し出してくれる子供達といると、何かをしてあげるのではなく、必要とされるからこそ役立つのだ、と感ずることができたのです。今回のボランティア活動を通して、様々な事を学びましたが、人に必要とされる喜び、という大切なものを得ることができた事が、私にとって、何よりも心に残りました。

■ 被災地における県立高校生のボランティア活動状況

災害救助法が適用された10市10町内の県立高校75校の高校1・2年生を対象とした調査では、4,504人がボランティア活動に従事したと回答している。生徒たちの主な活動内容は、救援物資の積みおろしや仕分け、分配、避難所での手伝い、炊き出し、湯茶サービス、瓦礫の片付け、屋根のシート張り、仮設住宅の手伝い等であった。

下表のA～D校は、被災地の県立4校の実態であるが、ボランティア活動に従事した生徒が多い。激震地区の真っ只中の学校では、自宅が倒壊していることや避難所生活を余儀なくされている関係で、かえって周辺校より少なかったことがうかがえる。

□ ボランティアに従事した



(平成7年2月13日現在)

手記

ボランティア

夢前町立前之庄小学校 1年 きたあさみ
わたしのおばあちゃんは、パーマのしごとをしています。あしたは、お休みなので、おなじしごとの人たちとボランティアで、こうべへカットをしにいきます。

おとうさんのリュックサックにタオルやしんぶん、はさみにかみそりなどいろいろなどうぐを入れてじゅんびをしています。

おばあちゃんがいったところは、こうべのながたというところですよ。

ゴムこうじょうがたくさんあるところがかじがひどかったところですよ。

たかとりえきから、あるいて小学校へいきました。

いくみちに、べっちゃんこにこわれたいえとか、もえてしまったいえばかりで、大きなビルが、よこやまえにかたむいて、あるくのがこわいぐら이었다そうです。

学校では、ろうかやきょうしつに、もうふやふとんをひいて、多せいの人が出て、そこでたべた

りねたりしてたいへんだったそうです。

ろうかには、いっぱいにもつがつんであって、小さい子どもが、はしりまわってあそんでいて、にぎやかだそうです。

その中のあいたきょうしつで、せいとがべんきょうしているそうです。

いえのなくなった人、かぞくをなくした人もかわいそうだけど、そこでべんきょうしているせいともかわいそうだったと、おばあちゃんはいっていました。

おばあちゃんがカットをしてあげた人、よろこんでくれたらいいなとおもいました。



手記

震度7の大地震

神戸市立高羽小学校5年 三木沙織

まさかあんな地震がおこるとはおもいませんでした。あの日の数秒間で神戸は変わってしまった。私はあの時、ねむっていたけれど、すごい音で気がつきました。周りの家のバタバタとたおれる音…。とてもこわかった。あの時間から私はずっとげんかんにうずくまってガタガタふるえていました。余震がくるたびに何かにぶつかって死んでしまうんじゃないかと思ったから。

それから一週間、家のあとかたづけと水くみでいそがしかった。私の気に入った花びんもわれてしまった。時々いどの水くみに行ったとき、その家の人に卵をもらいました。自分だけでなく、他の人のことも考えることはその時の私にはできませんでした。それでもそのおじさんは考えてくれたのです。とても心やさしい人だなと思いました。お父さんもバイクで大阪の会社まで行くのでとても大へんだといっています。それでも、会社へ行って会社の人に会いたいから行っているんだと思います。私も早く学校へ行って、みんなと会いたかったから…。私の家はだいじょうぶだったけど、こわれてしまった家もあるでしょう。こわれてしまった家の方がとても苦しい思いをしたんだと思います。私はまだいいほうなのでとても感謝しています。

私はとくに夜がこわかったです。電気がない夜はとてもこわくてさむかったです。そういう時にはさみしくなります。そして早くみんなに会いたくなりました。まだその時の気持ちは忘れられません。私の望むことは、早くクラス全員が集まることと、早く元のきれいな神戸にもどることです。今の神戸の人々のやさしい心ならきっと元にもどると信じています。私はそう思うのです。だから私も私のできることを進んですることにしました。こういうふうに一人一人ががんばればできると思います。そして元の神戸でまた新しく生きていきたいと思っています。



ボランティアでがんばったよ！！

神戸市立高羽小学校4年 浅野麻理子

じしんがあって4日目、わたしは、学校が始まるまで、ボランティアをしに学校にいった。たくさんの人が学校にひなんしている。だいたい五百人ぐらいだ。

きゅうえんぶっしておられるパンや牛にゅうをだいの上にのせると、たくさんのがあつまって、あっというまになくなってくる。つぎつぎになくなるパンは、たくさんの人にくばられた。お昼からは、たきだしがある。昼がおわると、水やおかしをおいでている。ときどきひまなときがある。でも、5時くらいになると、ほしいをパックにつめて、ゆかりをいれて、わゴムをして、だいの上においておく。あっというまに人のぎょうれつができた。わたしたちもパックにつめたりするのをてつだった。その日は、とつてもさむいので、手がこおってしまった。家にかえたらへやがとつてもあつたかくて、手がじーんとした。ストーブの前で手をあたたかくして2時かん勉強した。手は、まっくろで、手をさすたらギシギシ音がなつた。すぐ手を、せっけんであらうと水がつめたくて、手がいたかつた。また、ストーブの前で手をあたたためてからもうひとがんばり勉強を始めた。

きょうは、さむくて、手がこおつたけど、お手つたいをして人にやくだつてよかつた。早く学校がはじまつてほしいなと思つた。なん日もたつて、やつと学校が始まつた。みんなとあえてうれしい。いつも学校にいくのがたのしみだ。人数はすくないけど、じぎょうが始まつてよかつた。学校でボランティアをしていたからひょうしょうじょうをもらつた。とつてもうれしかつた。みんな元気がでてよかつた。